



TITLE:

ナチス革命の原理と価値の轉換

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. ナチス革命の原理と価値の轉換. 經濟論叢 1938, 47(1): 60-75

ISSUE DATE:

1938-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131121>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷七十四第

行發日一月七年三十和昭

(禁轉載)

論叢

「むすび」の道と統營經濟……………

經濟學博士 作田莊一

清算貿易制の諸形態……………

經濟學博士 谷口吉彦

時論

戰時の農業政策……………

經濟學博士 八木芳之助

消費節約に就いて……………

經濟學士 柴田敬

研究

ナチス革命の原理と價值の轉換……………

經濟學士 中川與之助

生命保険料の一考察……………

經濟學士 近藤文二

資本の流動化と再投資に就て……………

經濟學士 有井治

日本莊園の構造……………

經濟學士 江頭恒治

貿易理論について……………

經濟學士 松井清

說苑

貨幣の本質と價值……………

經濟學士 岡橋保

問屋制工業の資本主義的性格……………

經濟學士 堀江英一

附錄

彙報

外國雜誌論題

研 究

ナチス革命の原理と価値の轉換

中川與之助

一 は し が き

ナチス革命は世界史は民族の闘争興亡の歴史なりといふ世界觀から出發した¹⁾。而してこの世界觀によれば民族生活は人類にとりて最も自然的にして且つ基本的なものである。人は民族の中に生れて民族の中に死す。人の幸福も不幸も總て民族としてのそれに宿命付けられる。民族は人類にとりては自然共同體(Naturgemeinschaft)であり宿命の共同體(Schicksalsgemeinschaft)である。實に人間が生きていふことはかゝる共同體の肢體(Glied)として全體の中に生きること以外ならぬ。然るに舊き自由主義的世界觀は社會を單なる個人の集計(Summe)である如く考へたが故に、人々は個人主義・利己主義となりて、さては本來の共同體が「萬人の萬人に對する闘争(Kampf Aller gegen Alle)・階級憎惡(Klassenhass)・階級闘争(Klassenkampf)」と化して全體も個も共に自滅の途を辿らざるをえなくなるに至つた。ナチスはかゝる誤れる世界觀を打破して正しき世界觀に復らねばならぬとなして、革

1) A. Hitler, Mein Kampf. S. 12-13. 81.

命の第一歩を世界觀の變革に置いたのである。ナチス革命はかかる立場から行はれていたのであるが、この世界觀の變革が又自ら諸種の領域に於ける文化的價值の變革・轉換を齎らすに至つた。吾人は茲に新しき世界觀の下に舊き價值が如何に新しきものへ移りつゝあるかを述べやうと思ふ。

二 民族共同體の建設

新しき世界觀によりてナチス革命の目指す目標は民族共同體(Volksgemeinschaft)の建設である。併し建設といつても人爲的・恣意的に社會を組み立つることを意味しない。²⁾ 民族に内在する本來的な精神的・物質的諸能力を導き出すことに外ならぬ。さて然らばナチスのいふ民族共同體とは如何なる性質のものであらうか。ナチスの考ふる民族共同體はその基礎を血統(Blut)と國土(Boden)とに置く。³⁾ かれらがかれらの共同體を血族共同體(Rasse-gemeinschaft)・土地共同體(Bodengemeinschaft)ともよぶはそれによる。何故に血統に重きを置くかといふに、それは獨り民族を存続せしむるといふ生物學的な理由のみよりでなく、かれらの人間學的な立場からは(Rasse)血族には自ら同一の血族精神(Rassengeist)が存し、それが民族精神(Volkgeist)の基礎をなすと考ふるによるものであり、⁴⁾ 又ナチスが土地を共同體の要素なりとなす所以は、土地は民族の榮養の基礎であるのみならず、ゲルマンの民族精神は土地によりて育てられて來た。換言すれば農民魂こそゲルマンの固有精神なりとなすによる。之を要するにナチスが血統と土地とを重んずるのは、根本に於ては民族共同體を精神の共同體であるとき、更にその基礎をこれらの要素に求めるからである。「一人が萬人の爲めに、而して萬人が一人の爲めに」(Ein für Alle und

2) W. Sombart, Deutscher Sozialismus S. 243.

3) L. Häberlein, Das Verhältnis von Staat und Wirtschaft S. 19.

4) Jens Jessen, Volk und Wirtschaft S. 83.

5) J. Hellauer, Der Genossenschaftsgedanke im neuen Staat. S. 13.

Alle für Einen) とし、愛と犠牲の社會こそ共同體であるとなす。ナチスは更に言ふ。共同體は生ける全體であり組織である。それは意志をもち行動をもたねばならぬ。而して共同體がその意志を遂行せん爲めにはその成員は如何なる闘争をも厭ふべきでなく、あらゆる困窮をも共にすべきであると。かれらが民族共同體をよんで更に又意志の共同體 (Willensgemeinschaft)・行動の共同體 (Tatgemeinschaft)・闘争共同體 (Kampfgemeinschaft)・困窮共同體 (Notgemeinschaft) 等と名づけるのも如上の理由によるのである。さて然らばかやうな民族共同體は具體的には如何なる構造をもつであらうか。それは之を一言にすれば社會を職業的身分 (Berufstand) によりて編成し、指導者原理 (Führerprinzip) によりて運営せんとするものである。先づ身分的社會秩序を説明せんに、舊き世界觀の下にありては、社會は人々の爲めには營利の闘争場に過ぎず、そこに何等の全體的な統一的秩序はなく、いはゞ自然狀態に放任せられてゐた。ナチスはかゝる「無政府狀態」を解消して社會を人間のものに取り戻さうとなして茲に職業による身分といふ中世的な宗教的な理念を復活させたのである。それによれば職業 (Beruf) は單なる營利の手段に非ずして共同體に必要とする勞働の擔當として觀ぜられる。従つて職業には自ら全體的の統制が加はり一定の體系が成り立つてゐる。人はこの職業を通じて社會に奉仕しこの職業に就て社會的責任を負ふ。換言すれば人々は職業によりて勞働共同體の構成員となり又職業によりて社會的地位身分を獲得する。勞働の組織と社會の組織とは、かくて表裏一體の關係をなし、社會は秩序・階統をもち自然的な無政府狀態から解放されることをうる。次に指導者原理に於ける指導者とは共同體の意志・感情を最もよく體得する共同體人格の所有者を指す。ナチスによれば彼は民族と本質的に一體であり決して所謂獨裁者ではない。指導者原理とは國民がかゝる指導者を

信頼して、その指導に服従することを意味する。指導者原理によりて、始めて國民と國家とは人格的な結合をもち、眞の國民的意志が具現されうる。指導者原理による身分國家^{*}の運営こそ最も正しき國家の姿である。かくてナチス革命はかれらにとりては「革命中の革命」(Die Revolution der Revolutionen)であり「眞正の革命」(Echte Revolution)なりといはる。⁶⁾指導者原理に就て特記すべきは彼等の國家論である。かれらは指導者原理が國家の權力的獨裁に非ざることを高調し、ナチス主義にとりては「最高の政治價值は民族(Volk)であつて國家はそれ自体に何等の價值を有せぬ。それは民族の手段(Mittel)にすぎぬ」といひ、或は「國家は民族意志の單なる執行者(Vollstrecker)である」といふ。國家があつて民族があるのでない。國家は民族の國家(Völkischer Staat)である、従つてシュパンの説くが如き普遍主義・全體主義はナチスの國家論に當てはまらぬ。國家の優先權(Vorrang des Staates)はロマン人の原理であり、ゲルマンの原理は「民族の優位」(Primat des Volkes)にあるとなしてゐる。⁷⁾

三 價値の轉換

新しき世界觀による民族共同體とは凡そ以上の如き精神と組織とをもつものであり、それはナチス革命前の精神や組織とは根本的に相容れざるものである。従つて革命によりて舊き文化の價値が悉く破壊されて新しき價値が之に代つて行つた。吾人は茲に新舊價値が如何に轉換したかを考察しやうと思ふ。之を述ぶるに當りて政治上・經濟上・社會上・文化(狹義)上の領域に細分するが、もとより根本精神は一つなるが故に彼我に相通するものが少

*) Prof. A. Weber は Ständestaat といふ語は中世的なそれと同一視さるゝ虞があるから出来るだけ之を使用することを避けよといつてゐる。詳しくことは氏の Allgemeine Volkswirtschaftslehre S. 23 参照。

6) L. Häberlein, a. a. O. S. 1.

7) J. Jessen, a. a. O. S. 86.

8) 矢部貞治氏、「具體的共同體」論に就て(國家學會雜誌第五十二卷第四號)参照。

くない。従つてそれは便宜のために外ならぬのである。

(A) 政治的領域に於ける価値の轉換 (イ) 政治的価値の優位。舊き世界觀にありては經濟が社會の基礎であると考へられ、従つて政治的価値も經濟的価値の下位に立たざるをえなかつた。ナチスの觀點からすれば經濟が社會の規定者ではない。經濟も亦社會の創造にかゝり人の意志に支配さるゝものである。且つ如何なる國家を建設しやうかといふ包括的な政治的目的からみれば、經濟問題の如きは僅かにその一部分にすぎない。經濟がありて國家があるのでなく、國家がありて或は國家の爲の經濟なのである。⁹⁾ 以前の如き觀照は國家を經濟の奴隸とした。ナチス革命の使命はかゝる國家を經濟から解放するにある。換言すれば「經濟の優位」(Primat der Ökonomie)は「政治の優位」(Primat des Politick)にとり換へられねばならぬ。かくして經濟は政治の支配者から隷屬者に轉落するに至つた。(ロ) 民主々義より貴族主義へそして指導者原理へ¹⁰⁾ 從來の民主々義は「多數の原理」(Mehrheitsprinzip) 即ち多數が政治的支配權を握るといふ政治的約束によるものであるが、ナチスによれば多數は必ずしも國民の眞意を反映するものでなく、少數の意見必ずしも低劣とは限らぬ。民族共同體にありては民族の眞の意志が政治に反映することが根本であつて數の多寡は問題でない。民主々義は個人の平等主義の下に多數の人を政治に參加せしめたが、その結果は政治を凡庸にし無責任にし腐敗せしむるに至つた。ナチスの理論に據れば一國文化の進展は多數の凡庸の徒によりてなさるゝに非ずして優秀なる少數の人々の力によりてなさるゝのである。優秀なる民族が劣等民族を支配することの當然なると同様に優秀なる能力ある個人が他の凡庸を指導するのは當然であるとなす。かくして民主々義は斥けられて貴族主義・英雄主義・哲人主義の精神を汲む指導者原理が之に代るに

9) J. Hellauer, a. a. O. S. 6.

10) 本項は拙稿、ナチス主義と經濟的自己責任の原則 (經濟論叢第四十六卷第一號) 參照。

至つた。(ハ)權利より義務へ。國民共同體にありては個人の自然的權利や天賦人權を認めない。全體社會に於ける肢體としての個人には、全體社會に對する基本的義務を負へども基本的權利などはありませんのである。¹¹⁾蓋し權利は負はされたる義務を遂行するためにのみ與へらるゝものなるからである。元來ゲルマン人は權利を主張した民族ではない。寧ろ義務を遂行するといふことが彼等の特性であつた。¹²⁾權利を先に立てゝ本來不平等なる人間が等しく平等の權利を主張するが如きは西歐からの外來思想である。かゝる個人主義的平等主義的權利觀をすてゝ古來のゲルマン精神に復らねばならぬ。新しき國民社會主義は如何なる權利をも要求しないのであるとナチスは説く。

(B)經濟的領域に於ける價值の轉換

(イ)勞働觀の變革

個人主義時代には勞働は苦痛でありやむをえざる人間的社會的犧牲なりとせられた。従つて勞働の犧牲を最少限度に止めやうとする勞働の回避・轉嫁を以て合理的なりとせられた。ナチスの觀點は之と異なる。かれらによれば勞働は人格の表現であり生の歡びである。人は勞働によりて共同體へ寄與しうる。勞働は共同體成員の義務であるのみならず又名譽であり權利である。¹³⁾勞働を回避することはこれらの義務を怠り名譽を失ひ權利を棄つることであり、共同體成員として最も耻づべきことである。殊にナチスは社會進歩の根本を創造にありとみてゐるので一層勞働を尊重する。蓋し勞働はそれ自體創造に外ならぬからである。かれらが「共同體に於ける個人の價值は彼が共同體に向つて何を給付したるかによりて定まる」といひ、「唯勞働と行動にのみ生活の意味がある。吾人は生きんが爲めに働くに非ずして働く爲めに生きるなり」¹⁴⁾となし、「ナチス社會主義は勞働するものゝ社會主義なり」等々いふのも何れもかれらの勞働觀をいひ現はしたものである。

11) エルマース著多田氏譯ナチス經濟讀本 p. 83 及び具島氏譯ナチス準戰時國家體制 p. 131-2.

12) J. Hellauer, a. a. O. S. 25. J. Jessen, a. a. O. S. 91.

13) O. Dietrich, 論文 Economic Thinking in the new Germany (The Annals of the American Academy of Political and social science, May, 1937) 参照。

14) 15) J. Hellauer, a. a. O. S. 13, 及び S. 4.

のである。かゝる勞働觀に立つナチスにありては従つて又、人々に勞働を提供することゝ提供せられたる勞働を完全に遂行せしむる條件を作り出すことを以て國家の義務なりとなしてゐる。又以て舊世界觀に於ける觀照の大きな變革といふべきである。かゝる觀照に立つナチスにとりては勞働の成果たる私有財産をも勿論尊重して之を廢止するが如き者を有つてゐない。併し彼等は所有よりも寧ろ創造に大なる價値を認めてゐるのであり、この點に於て又新時代に入りては資本・財産の價値よりも勞働の價値を高く評價するに至つたといふべきである。ナチスが私有財産を認むると雖も社會的見地から之を認むるのであつて、個人的にも社會的にも何等創造に役立たぬが如き所有の状態や程度は勿論之を認めない。即ちナチスは私有財産に對しては、共產主義者の如く全廢論者に非らず又自由主義者の如く之を神聖化するものでもない。社會的創造に貢獻することの如何によりて之に統制を加へんとするものである。ナチスが私有財産に對しては、中立的なりといふはこの意味である。¹⁶⁾ 公益より公益へ。舊き自由主義社會に於ては「私利を通じて公益へ」といふ原則が行はれたから經濟上も私益が第一になつてゐた。併しナチスにありては共同體の維持發展といふことが最高目標であるが故に、經濟上も亦この全體的利益即ち公益を第一としなければならぬ。茲に於て「公益は私益に優先す」(Gemeinnutz vor Eigennutz)の原則を樹てた。¹⁷⁾ 但し公益を尊重するといふことは私益を排除することを意味しない。ナチス經濟にありても依然として私益の追及や私的創造がその根本をなしてゐるのである。ナチスは個人の利益や幸福を全然なくして利他心のみで働けといふが如き社會は發展性をもつものでない。公益と矛盾せざる或は公益の基礎となるが如き私益は全體主義の立場からも之を認めねばならぬとなしてゐるのである。されば公益を尊重するといふことは毫も經濟の國家化

16) Jens Jessen, a. a. O. S. 95.

17) 獨逸國民社會黨綱領第廿四條。

(Versäufung) 或は産業の國營化を意味するものでない。ナチスは聲を大きくしてかゝる經濟の國家化・中央集權化はボルシェヴィズムやファシズムの採る所であつて、わがナチ主義と根本的に相容れぬ所であるとなしてゐる。¹⁸⁾ ナチスはいふ。「創意心は經濟的進歩の最も有力なる能因であり、我々の文化の必須條件である」。¹⁹⁾ 「國家は不必要なる干渉を企業に對してなすべからず」²⁰⁾と。ナチス經濟に自由や創造の殘さるべきは上の如くなるが、經濟政策の最高原則が公益に轉じたことは舊時代の私益本位の政策からの大なる轉換といはねばならぬ。²¹⁾ 農業及び農民の重要視へ。ナチスが農業及び農民を重要視するに至つたのはその世界觀に基づく。既に述べたる如くこれらの民族共同體は血縁と地縁との結合である。共同體をか様な見地からみれば、農民は最も共同體的性格を有する。農民に於ては都市民に於けるより血統の純潔が保たれて居り且つ人口の増加率も遙に大きい。ナチスは農民こそ血統 (Blut) と血族 (Rasse) の運載者 (Träger) であり、「血統の源泉」 (Blutquelle) であり民族の生命の源泉 (Lebensquelle) となりとなす。²²⁾ 更に農民はその職業の性質上最も親しむ。祖國の國土・自然を愛するもの農民に如くはない。農民にこそ古來のゲルマン精神が宿つてゐるとせらるゝ。ナチスが農業及び農民を重要視するのはこれのみに止らぬ。農業は國民榮養の源泉である。ナチスは次に述べる如くアウタリキー政策をとつてゐるので一層農業が重要となつてくる。ナチスはこの外に商工業の根本が農業にあるといふ見地からも農業を重要視する。之を要するに共同體精神の上からも國民榮養の見地からも商工業の繁榮のためにも農業及び農民は根本的に必要なりといふことになる。ナチスはいふ。「獨逸農民階級に民族共同體の運命がかゝつてゐる」²³⁾と。²⁴⁾ 自由貿易よりアウタリキーへ。²⁵⁾ ナチスによれば民族共同體の確立の爲には共同體の生活が他の力に倚賴しなくとも自足出

18) Jens Jessen, a. a. O. S. 94-5.

19) 20) 具島氏譯前掲書 p. 76, d. 150.

21) J. Hellaner, a. a. O. S. 7-9.

22) J. Hellaner, a. a. O. S. 7. 23) 阿部源一、アウタリキーの思想的背景 (國民經濟雜誌第五十八卷第一號) 並びに、建林正喜、獨逸アウタリキー政策のロマン的性格に就て (國民經濟雜誌第六十一卷第一號) 參照。

來るものでなければならぬ。蓋しかの自由貿易の如き原理によりて交易に依存してゐるならば、一朝有事の際には忽ち共同體はその存在を脅されるからである。されば共同體はアウトリキを究極目標として進まねばならぬ。ナチスがアウトリキの理念を抱くのは獨り經濟上の理由のみからでない。貿易によりて自國を世界の市場となす場合には、雑多の民族の血統や思想が流れ込んでゲルマン文化を混濁させる。民族の血統と思想の純潔を保つにも他民族との交渉の少きことを望ましとする。且又ナチスは今日世界に鬭争の絶えざるは各國民がアウトリキを確立してゐないからである。されば世界平和の再建の爲めにも各國民はアウトリキを指すべきであるとなす様である。(ホ)その他ナチスが中小企業を保護せん爲めに大企業を抑制してゐることや、分配政策よりも生産政策に重きを置くに至つたこと、企業的利潤よりも寧ろ國民的欲望充足に重きを置くに至れる如き何れも舊時代の政策の轉換であるが、上述の諸項に比すれば第二次的と考へらるゝが故に詳説を省く。

(C)社會的領域に於ける價值の轉換 (イ)ナチス革命は民主主義や全體主義の原理から個人主義・階級主義を斥けて新に職業的身分國家を編成した。今日のナチス獨逸では理論的にも實際的にも資本家と勞働者との利己的な對立や鬭争は許されない。資本も勞働も企業家も勞働者も共同體の爲めに與へられたる機能を果たすべき義務を負はされてゐる。従つて(ロ)舊き世界觀の下では政策の階級的價值が常に核心をなしたが、今日は全體的價值が問題となる。社會政策も從來は階級政策であつたが今日に於てはその任務は、民族共同體に於ける身分的社會秩序を維持し、各人をして全體の爲めに貢獻せしむる様に保護するにある。個人や階級の平等的權利を基調としたるが如き社會政策はもはや存しえない。勿論今日の社會行政も勞働者の保護を重要視してゐるが、それは全體社會の爲

めであつて企業家に對する抗争の爲めでも又勞働者の權利の爲めでもない。(ハ)社會保險も社會民主主義時代には階級政策的立場から賃銀の補充或は富の再分配の制度なりとせられたが、今日は民族共同體の維持發展の爲めに社會的困窮を除き更には國民保健のために存するものとせらるゝに至つた。²⁴⁾(ニ)社會事業も舊き時代には人道主義或は階級主義の立場からなざるゝ救護なりとせられたが、ナチスに至りてそれは民族保護(Volkspflege)血族保護(Rassenpflege)であり、民族として價值多き同志を作ることこそ社會事業の目標であるとせらるゝに至つた。²⁵⁾(ホ)ナチス共同體に於ては家族が特に尊重せらるゝに至つた。蓋し家族は民族の血統と精神の繼承される基本的社會であるから、人口政策・思想政策等から重要視されるのは極めて當然である。加之、ナチスは舊時代の如く經濟・社會的責任を悉く國家に集中せしめた弊を避けて責任の分散主義をとつた。その政策が家族制度の尊重・強化となつて現はれてゐるのである。(ヘ)家族の尊重は婦人の家庭的職能を高く評價せしむるに至り、婦人を勞働戦線から退かしむるに至つた。舊き時代に於ける如き婦人と男子との平等觀や婦人の自立といふが如き思想はすてられて、女性として妻として男性と協力して社會に奉仕すべきものとせらるゝに至つた。(ト)ナチスは新しき世界觀による民族共同體は一朝一夕に完成するものでなく、その完成は舊時代の人々よりも寧ろ若き少青年に俟たなければならぬとなして、少青年の教育・保護・訓練を非常に重要視してゐる。個人主義時代には營利能力ある成人の價值が高かつたが、ナチスでは未來を重んじ現在よりも未來的價值ある人々を尊重するに至つた。以上社會的領域に於ける價值の轉換は之を要するに個人的階級的價值より身分的・全體的價值へ、平等的價值より不平等的・階級的價值へ、凡庸的價值より英雄的價值へ、萬民的價值より民族的價值へ、現世的價值より未來的價值へ

24) 拙稿、ナチス政策と獨逸社會保險の改革(經濟論叢第四十五卷第六號)参照。
25) 拙稿、戰前戰後の獨逸社會事業(經濟論叢第四十二卷第一號)参照。

の轉換である。

(D)文化(狹義)的領域に於ける価値の轉換 (イ)物質より精神へ。ナチスの共同體は精神を基礎とし物質的なものを基礎とするのではない。かやうな共同體に於ては精神が物質より尊重せらるゝはいふまでもない。ナチスによれば民族は神の造り給ふたものであり人は神の子である。人が靈性を喪失(unsacred)することは物質化することでありそこに人類の墮落が始まる。古來の歴史をみると物質の爲めに多くの民族や個人が亡びてゐる。されば人間は物質に支配さるべきに非らずして之を支配すべきである。物質も亦人間の創造したものであつてそれは決して不可抗的の力をもつものではない。資本主義やマルキシズムは經濟の「永久的法則」とか萬人に通ずる「經濟原因」を探究したが、かゝる物質的な考へ方は、經濟生活の創造的・形成的要素としての人間の精神・理念・理想を無視するものである。²⁶⁾ かやうな立場からナチスは精神を讃へ物質文明を蔑み英雄や天才を尊び冒險や敢爲や發明が獎勵せられ享樂や利用を卑しむ。神的なるもの聖なるものに最高の価値が置かれて宗教はかつての阿片の地位から再び精神の王座に復つた。ナチスは「信仰は人間を動物的存在の水準以上に高め上げる……」²⁷⁾といひ又「國民の信仰は獨逸社會主義の前提なり」²⁸⁾ともいふ。ナチス運動は基督教の基礎の上に立つてゐることは黨の綱領に照しても明かであり、²⁹⁾ ナチス運動は神の命令であるとさへいつてゐる。(ロ)理性文化より生の文化へ。近世自由主義は啓蒙時代の産んだ理性主義の發展である。理性の命ずる所は即ち自然法に合致し自然法によりて動く社會は理想の社會であると考へられた。併しかゝる理性も個人主義的世界觀の下では利己・營利・鬭争の武器となり了せて社會の全體性を破壊し人間の文化を無味乾燥にした。ナチスの全體主義・民族主義はかゝる個人主義にも理性主義にも正

26) O. Dietrich の前掲論文參照。

27) A. Hitler, a. a. O. S. 8.

28) 秋澤氏譯、ナチスの哲學と經濟 p. 135.

29) 獨逸國民社會黨の綱領第廿四條參照。

反對の立場をとる。ナチス運動は理性や打算や功利から出發したものでなく、やむに止まれぬ民族的生——民族的本能感情・意志等の迸り出たものである。それは本能的であり自然的であり超個人的であり超理性的である。かゝる生は生のみがこれを理解しうる。³⁰⁾ 偏狹なる個人的理性の到底解し能はぬものである。かやうな立場からナチスは舊き個人主義・唯物主義・合理主義・理知主義を排して生ける全體としての國民の生命力に共同體の基礎を置かうとする。民族的生を基礎とするナチスは又その當然の結果として行動を尊ぶ。蓋し生きるといふことは意志し感情すること即ち行動することに外ならぬからである。ヒトラーも「我々の求むるものは眞理でなくして行動である」³¹⁾といふ。その意味は世界觀の變革に當りて偏狹なる知性を弄ぶの愚を排するといふに外ならぬ。ゾンバルトも行動性はゲルマン民族の特性であるとなして、ナチスの創造や行動の理論を支援してゐる。³²⁾ 都市文化より農村文化へ。ナチスは都市殊に大都市文化を嫌惡する。蓋し都市文化は自由主義・個人主義・資本主義文化の爛熟せるものなるが故である。先づ都市文化は理性の文化である。市民の生活は利己の爲め營利の爲めに間隙なく合理化されて人間的な感情や意欲は凡て犠牲にされてゐる。ナチスの言葉を使へば Geist と Seele が分離してゐる。又都市文化は物質文化である。營利主義の文化は人々をして物質に大なる價值を認めしめて精神的なるものを輕んぜしめる。人々は物質を跪拜し物質に支配されてゐる。物質の追及は他との爭奪である。されば都市文化は物質的・鬭争的・破壊的である。物質文化に於ては精神的・內的なるものゝ反省がなくなりて人々は感能的・物質的享樂をのみ追及する。都市文化はかくして廢頽的となる。更に又都市文化は人爲的である。自然との接觸は少く土に依存することが少い。人々は對人關係によりて又不動產の代りに動產關係によりて生活する。

30) 秋澤氏、前掲書 p. 87-8.

31) この項に就ては Jens Jessen, Volk und Wirtschaft S. 105-133 参照。

32) 具島氏譯、前掲書 p. 70. 多田氏譯前掲書 p. 47-50. その他。

従つて人生の自然的なるものは失はれて人爲的に不曲され、祖國に對する愛は薄らいで彼等の性格は移民的浮動的である。都市文化の特色は更にその國際的な點にある。都市では他民族との交渉は多くして爲めに民族の血統や思想は異質的なものと混和されて固有性を喪失してゆく。然も又都市では人口の増加率は少く寧ろ民族蠶食的(Völkerfressend)である。凡そ以上のことを數へても都市文化は新しく建設せられんとするゲルマン共同体にとりて甚だ願はしからざるものである。之に反して農民の生活は都市民に比すれば遙に非營利的であり、自然的な人間的な感情や精神が多分に残されて居り、又かれらは都市民の如く物質に大なる價値を認めず、寧ろ精神の力・宗教の力に多く依頼する。かれらの魂は物質的なもの人爲的なものに支配さるゝ機會は少く自然的なもの神的なるものに向ふ。且つ彼等の魂は常に土に結ばれるが故に祖國を愛すること最も強い。加之、農村では人口の増加率が高く都市人口を補給する。かく考ふる場合に農村文化こそ新しき民族共同體の基底をなすものでなければならぬ。ナチスの農民政策はかゝる見地に立つて舊時代のもものを一變せしめた。

四 批判及び結び

ナチス革命の原理並びにそれに伴ふ文化的價値の轉換は上述の如くなるが、何故にかゝる轉換が行はれたかに就ては固より獨逸的な事情が存する。即ち世界戦争に於ける敗北・ヴィルサイユ條約による國土の割取及び苛酷なる賠償金の負擔・國民經濟の疲弊・インフラチャオンによる中等階級の没落・巨大なる數に上る半ば永久的な失業群の發生・社會思想の混亂・マルキシズムの普及浸潤・共產黨の勢力の擴大・鎬を削る勞資の階級闘争・祖

國文化の衰廢・財政破綻・國際的無力化・人口減退等々は人々をして獨逸國家・民族の自滅を思はしむるに至つた。この秋に當りわれらの民族・祖國を救はざるべからずとなして蹶起したのがナチス運動である。それは潰滅に瀕した獨逸民族の生の反撥であり民族的本能・感情・意志の爆發である。ナチスは獨逸をかくまでに悲慘ならしめたものは國內的には個人主義・唯物主義・マルキシズム・社會民主主義であり國際的には個人主義的な世界機構並びにそれに依存する國際聯盟の横暴なりとなし、先づ國內を融合統一して對外的國難に當らざるべからずとなすに至つたのである。これが即ちナチス革命をして民族意識を高めて他民族わけでも猶太民族を排斥せしめ、唯物主義・個人主義を抑へて精神主義・全體主義を叫び階級闘争・國內相剋を斷壓し國家・民族への奉仕・貢獻・犠牲の徳を讃へしむるに至らしめたが、要するにそれは舉國一致の觀念と組織を整へしむるにあつたのである。吾人が上に述べた諸々の價值の轉換は何れもこの舉國一致の體制を整へんとする最高原理から現はれる當然の系である。

ナチスの所謂民族共同體の理論はかやうな獨逸的事情によりて生まれるに至つたのであるが、翻つて吾人はこれらの理論の構成をみる場合、そこに自ら獨逸的な型を見出さざるをえぬ。その二三を擧ぐるならば、(い)ナチス運動は基督教の信仰に基いて居り、然もそれは獨逸的な信仰によつてゐる。例之、「ナチス運動は神が獨逸國民を解放し偉大ならしめるために獨逸國民に與へたものである」³³⁾とか、「わが祖國の使命は神の命じ給へるものである」³⁴⁾とか「ヒトラーは北方神の使者なり」とかいふのがそれである。(ろ)指導者原理がプロシヤの軍隊的秩序から採られてゐる。ヒトラーも「嘗てプロシヤの軍隊をして獨逸國民の驚異的な武器たらしめた所のかの原則

33) 具島氏、前掲書 p. 92.
34) 同上、p. 93.

——あらゆる指導者の權威を下部に及ぼし責任を上部に及ぼせ (Autorität jedes Führers nach unten und Verantwortlichkeit nach oben) といふ原則こそは將來移して以て我國の憲法の全構成の根本原則たらしめねばならぬ³⁵⁾と説いてゐるのをみてそれは明かである。(は)ナチスが理性主義を排して人間的な本能や感情或は非合理的なものを重んずることや個人主義を排して全體主義を唱へるのは啓蒙的哲學の精神に反抗して起つた當てのロマンチズムの精神の再現であり、シェリングやアダム・ミュラーの復活である。理論的・哲學的であると同時に實際的・現實的であり、現實的であると同時に理想的・幻想的である彼等の民族性がナチス運動に遺憾なく現はれてゐる。(に)ナチスの思想は國際的・世界的でなく國家的・民族的であり排他的・封鎖的である。この點もゲルマン古來の思想的傳統を現はすものでロマン人の考へ方と方向を異にする。ゲルマン民族による大ゲルマン國家の建設は³⁶⁾久しい間の彼等の夢である。且又民族意識の高揚によりて國難を突破して來た幾多の歴史も亦自ら彼等をその方向に赴かしめるやうである。(ほ)アウタリキーの思想もゲルマン民族に久しい傳統をもつといはれてゐる。³⁷⁾ナチスが民族的でありアウタリキー政策をとることは、總て壤太利を合併し植民地を要求する所以であるが、この思想は他民族との共存共榮といふ點に於て從來も多くの缺陷を暴露した。ナチスは併し乍らこの思想を踏襲するやうである。(へ)ナチスは農民精神を尊ぶが由來ゲルマン民族は森の子といはれ農業を主業として民族である。彼等はアングロサクソンやロマン人に比すれば、遙かにその性格は農民的である。自然を愛し土に親しみ祖國を愛する。非功利であり素朴であり義務觀が強く犠牲心に富む。ナチスが共同體精神の典型を古來の農民精神に求めたのは蓋し當然である。(と)その他ナチスが人格や創造自や由を尊ぶのも行動を主張するのも何れも民族的な傳統に發してゐる。かく考ふるならばナチスの共同體理論はそのまゝ他國に妥當するものに非ざるは言ふまでもない。

35) A. Hitler, a. a. O. S. 85.

36) 獨逸國民社會黨綱領第一條參照。

37) 具島氏譯、前掲書 p. 45.

吾人は最後にナチス共同體に残されたる若干の問題に簡単に觸れてこの稿を終らうとする。ナチスは共同體の要素として血縁と地縁とを結ばんとするが、例へば若し他國の領土が獨逸領となつた場合、その土地に住する他民族を如何に遇せやうとするのか、又他國に住むゲルマン民族は國土から離れてゐるから共同體構成員としてみないのか、又若し之を自國の共同體構成員とみんとする場合他國の領土權を如何にするのか、これが第一。次にナチスは基督教によるといつてゐるが、實際をみると必ずしもそれに従順でなく寧ろ政治の爲めに教理や宗規を改廢せしめてゐる。³⁸⁾換言すれば政權を以て教權を壓迫してゐるのであるが、これは果してそのまゝに終るものであらうか、吾人の觀る所を以てすれば、往年の如き政治と宗教との所謂文化闘争 (Kulturkampf) が他日再び擡頭するに非ざるかを疑ふ。蓋し宗教以上の政治原理の存しない國々に於てはそれはやむをえぬであらう。これが第二。次にナチスは民族は目的にして國家は手段なりといふが、國家と民族とのかゝる機械論的な考へは二者の相剋を約束するものである。蓋し民族は目的なるが故に飽く迄も國家や權力を自己の手段としてそれを支配しやうとすべく、國家は又己れの目的に民族を改鑄せん爲めに民族を強要するであらうし、爲めに國家目的からいへば民族は手段視せられざるをえぬからである。かゝる對立相剋は國民と國家とが本質的に一つであり國家の中に國民が國民の中に國家があるとせらるゝ場合に始めて解消せられる。併しそれはナチス獨逸に於ても求めるは困難である。指導者は獨裁者に非ずといふもナチスの理論を以てすればその實踐に於て獨裁的ならざるをえぬであらう。現にナチスでは指導者の批判は許されぬのである。

以上を要するにナチス共同體の原理やそれに伴ふ文化價值の轉換は、何れも獨逸的事情によりて獨逸的な文化の上に成立したものである。吾人は之によりて共同體理論に於ける獨逸型を學ぶことをえた。それは多くの示唆に富むと共に内在的な缺陷をもつてゐることも忘れてならぬのである。(二三・六・八)

38) 堀豐彦氏、ナチス全體主義國家とカトリック教會(國家學會雜誌第五十二卷第四號)參照。